

幼 兒 の 教 育

昭 和 八 年 十 一 月

自 ら 責 め る 心

子ぎもの性質の中に見つけられる缺點が、あまりにも悉く自分の性質の中にある缺點そのものであるのに気がついて、ぞつこして立ちすくむやうな氣持になるのは、親に屢々ある實感である。組の幼兒と先生との間にも同じやうなこじはないものであらうか。悪い子は皆私によく似てゐる。そんな氣のすることはないのであらうか。

親がわが子を叱るのは自分を叱つてゐるのである。初めこそわが子を責めても見ろ。お前はお前は、よそごこのやうに呆れても見たりする。しかし、やがて苦しくなつて来るのは自分自身である。わが子を前に引きすへて置いて、その實いつても、われと自分に身悶えしてゐるのが親である。組の先生には、そんなこじは全くないものであらうか。

親はいつでもわが子に濟まないと思つてゐる。先生もきつと同じこじであらう。